

# 白楊ヶ丘札幌

## 岐路に立つ中部高校に期待する



札幌支部 支部長

黒田 信彦

(第七三期・昭和四十六年卒)

この原稿を書いているのは平成三十一年四月ですが、皆様のお手元に届くのは令和元年になります。最近では西暦を多用することもありますが、やはり我が国の歴史と文化を考えたとき、元号は身近なものとして親しまれていることは四月一日の元号公表の際に感じたのは私だけではないかと思えます。その理由は様々あると思えますが、平成時代の天皇皇后両陛下の国民に寄り添うお人柄が浸透したことが大きな要因の一つかと思っています。最近では国旗・国歌に対して偏見を持つたり真正面から反対の姿勢を現わしたりする方は減少してきたように感じます。国旗・国歌が戦争に繋がるといった思いは時代とともに薄れ、真摯な

気持ちで平和な日本を望む国民が増えてきた証かも知れません。私の在学中は丁度七〇年安保闘争やベトナム戦争反対運動の渦中にあり、高校紛争が各地で起こっていて中部高校も一九六九年の卒業式では校長の式辞の最中に生徒が演壇を占拠し、式が一時中断する場面がありました。学校封鎖などの大きな混乱には至りませんでした。当時の中部高校は四十五人学級で一年九〜十クラスでした。団塊の世代の直後の時期で生徒数は多く大学の数も限られていて熾烈な受験競争が行われていた時代でした。手元に残っている当時の資料では、一九六八年〜一九七〇年の三年間で北大に百三十名、東大は一九六九年は入試が中止に

なり三年間で二名が合格し、その後も東大や京大に合格者が出ていました。当時は個性豊かな先生が多く勉強は自分の力でするものだという雰囲気があり、先生方はご自分の得意な独特の授業を行い、現在の授業スタイルとは比較する余地もありません。あれから四十年近く経った二〇〇八年に私は三十五代の校長として母校に着任しました。中部高校の歴史と伝統は受け継がれていましたが、少子化が進み一学年六クラスまで減り進学実績も大きく落ち込み、ナンバースクールとしての位置づけが怪しくなっていました。北大には二十名前後しか合格せず、東大には暫く合格者が出ていませんでした。少子化の中で大学の数は増え続け十八歳人口よりも大学定員の方が多いた時代にあつて、最近では、はこだて未来大学や弘前大学に多く進学しているようです。北大の合格者数だけで学校の進学実績は評価で

きませんが、二〇一八年は十四名の合格者数で十九位、二〇一九年も十四名で十七位と低迷し、私の在学中はベスト五位くらいに入っていた勢いは失せてしまいました。中部高校は、『四十七都道府県の名門校』（平凡社）、『ニッポンの名門高校』（宝島社）、『名門校人脈』（光文社新書）に名を連ね、日本浪漫派を代表する評論家の亀井勝一郎氏、探偵作家・演出家など八面六臂の活躍をした久生十蘭氏、共産党書記長の後、政界の黒幕として暗躍した田中清玄氏、田中角栄の大番頭として名を売った政治評論家の早坂茂三氏、将棋界の王将位・棋聖位のタイトル保持者二上達也氏、近年若くして亡くられた時代小説作家の宇江佐真理氏（七〇期）はじめ著名な方々を数多く輩出しており、今後も歴史に名を残す同窓生が現れることは間違いないと思っています。

## 同窓会に参加を



白楊ヶ丘同窓会会長

石井直樹

(第六三期・昭和三十六年卒)

白楊ヶ丘同窓会札幌支部  
定期総会・懇親会のご盛会を  
心からお喜び申し上げます。

今年はこの五月に元号  
が変わりました。北海道函  
館中部高等学校は、明治  
二十八年に函館尋常中学校  
として創立以来、幾多の校  
名や制度の変更を経て、元  
号としては五つ目になりま  
すが、百二十四年の伝統と  
歴史を誇っております。

函館中部高校は南北海道  
のリーダーともいわれ、こ  
の間の多くの優秀な同窓生  
を輩出してきましたが、そ  
の中には、世界の各地で活  
躍をされ素晴らしい実績を  
残した方も数多くおられ、  
今なお社会に貢献されてい

る方も多いと聞いておりま  
す。このことは、函館中部  
高等学校としても白楊ヶ丘  
同窓会としても、そして在  
校生にとりましても大きな  
誇りです。

ご承知の通り、白楊ヶ丘  
同窓会の本部は函館にあり  
ますが、全国には四支部が  
あります。同窓生の皆様に  
は進学先や就職先など、個  
人個人の生活の拠点から利  
用しやすいところには是非出  
席していただければと期待  
しております。

ところで、同窓生の皆様  
の故郷函館そして母校であ  
る函館中部高校を想う気  
持ちは、卒業から何年経過  
しても変わらないものがあ

ると思われれます。青函連絡  
船が運航していた頃、函館  
の街並みにも活気が見られ  
ましたが、昭和六十三年に  
廃止となり、一方で青函ト  
ンネルが開通し、三年前に  
は待望の北海道新幹線が開  
業し、天候に左右されるこ

す。いずれにしろ利用者の  
増加の方向にもっていくこ  
とが期待されるところであ  
り、北海道新幹線が道央ま  
で延伸されることにより、  
沿線自治体の人口減少の食  
い止めにもつながっていく  
のではないかと思われれます。

となく本州方面と確実に結  
ばれることとなり、進学や  
就職にも変化が出てきまし  
た。しかしながら、全国的  
な傾向と思われれますが、大  
都市に人口が偏り、地方都  
市の人口減少が著しく、と

二年後には、函館中部高  
校の入学定員数も二百四十  
名から二百名になるとのこ  
とで、小学校や中学校の統  
廃合の動きが高等学校にも  
及んでくるものであります。

## 東京支部だより

この六月一日に、函館で  
我々の同期会を開きまし  
た。五十五名が全国から集

結びになりますが、黒田  
支部長をはじめ皆様のご健  
勝ご活躍と札幌支部の一層の  
ご発展を祈念いたします。



白楊ヶ丘同窓会東京支部長

白川正広

(第七六期 昭和四十九年卒)

白楊ヶ丘同窓会札幌支部  
の皆様には、お変わりなく  
お過ごしのこととお喜び申  
上げます。また、日頃よ

り、当東京支部へのご支援  
に厚くお礼申しあげます。  
札幌支部報三十五号の誌  
面をお借りして、東京支部の

昨今の状況をお伝えします。貴支部の活動のご参考にしていただければと思います。

まず、ご報告すべき内容として、東京支部は役員任期は三年という規約になっております。今回が改選期に当たります。先日、開催されました評議員会において、支部長・副支部長の役員全員が重任すること承認いただきました。引き続き、三年間、よろしくお願い申し上げます。

さて、東京支部の主な行事として、秋に、会員全員



新人歓迎会の様子

に呼び掛けて大会を催しております。活動方針や人事の件は春の評議員会で済ませ、秋の大会では議決のようなことは行いませんので「親睦大会」と呼んでおります。校長先生や同窓会本部の方のご挨拶はいただきますが、余興が目玉の会です。そのあたりの企画運営を、「その年に五十歳になった期」が担当することにしております。今回は、八九

期、昭和六十二年卒業の期です。

毎年くりかえされる光景なのですが、同窓会にまったく関心を示さなかったメンバーであったものが、「今回は主役だ」という「バトン」を渡されると、その同期の皆さんがたいへん熱心に、親睦大会の目玉のイベントはどういうものにしよるか、から始まり、その他、会場の段取りや予算計画なども含め、頻繁に打合せを持って対応してくれて

います。これが東京支部のパワーの源泉だと申しても過言ではありません。

実は、このメンバーの三十年間はどうかだったのかと振り返ってみますと、自分たちの出番がくる直前まで、会への出席率は、ほとんどゼロでした。それが、一つ上の期の先輩からの連絡があり、簡単な引き継ぎによって主人公になると、ひと声「二十名」単位で会に参加してくれるということが引き継がれております。

私はこれで良いと思っております。いや、これが良いと思います。高校を卒業し大学などで学び、社会に出て仕事に就く。やがては結婚して家庭をもつ。子育てが始まる。そういった期間は、仕事も多忙でしょうし、家庭をとりまく様々な行事があるため、同窓会には本音で、参加する時間を割くことができないということになっていると考えら

れます。

今の時代のありがたさは、紙媒体の「名簿」をマメに作っていない場合でも、いざとなったら、メールやSNSを通じて連絡がつき、情報伝達が行きわたる点です。まとめ役が一人いれば、五十歳になってから同窓会に大量に「再入会」してくれそうです。

ところで、東京支部では函館を離れ関東の大学などに進学するメンバーを卒業式の「出発点」から把握し、十九歳の夏に集まってもう、新人歓迎会を二年前から始めました。この狙いは、今後引き続き同窓会に出席してほしいという点にあるわけではありません。八九期のメンバーがそうであったように、四十九歳マイナスイシ、二十九歳の約三十年間は、会社や家庭で充実した時間を過ごしてほしい。ただし、五十歳になったら時限装置のように、同窓会の主役に

なるという役割があることを若い頭の隅にしつかりと刻んでほしいということを新卒者にもお話ししています。そういう観点で、このような「新人歓迎会」の企画運営も、五十歳の幹事期の皆さんにお願いしました。自分たちがしてきたことを、三十年後に主役になる新卒者の皆さんに伝授してもらおうという趣旨です。

いったん、同窓会の幹事という役割がきっかけで五十歳のときに横の連絡ができた同期の皆さんは、それ以降、六十歳になっても同期のつながりが活発になる傾向にあります。そういう点で、多少の無理があっても幹事一式をお願いするという仕組みが幹事役の期の皆さんにとって、たいへん良い贈り物になったと感謝の声をいただいております。

新人の皆さんは、次は「令和三十年」頃に四十歳

台の後半となり、そろそろ同窓会の役割があったとスィッチを入れてもらうことになれば組織は安泰です。

少子高齢化の時代の波は函館にも影響し、小中学校が次々に統廃合していると聞いています。わが函館中部高校も、この先、定員減少やクラスの削減という施策が必要になるかもしれません。あるいは、西校と稜北高校の統合が今回あったような変化があるかもしれません。

新卒者の皆さんが三十年後の役割をしっかりと認識してくれている限り、同窓会は時代にあわせて運営方法を少し変えるような微調整が必要であったとしても、とりあえず令和三十年頃までは継続していくことが可能であると考えております。話は変わりますが、東京では、函館市内の公立校五校の同窓会の会長・支部長が集まり組織の課題を情報

交換する「東京臥牛会」という会合があります。実は、「五十歳の期が同窓会の大会の企画運営を担当する」という運営方法は十四年前に東校の「関東青雲同窓会」が行っていたうまいやり方を参考にして取り入れたものです。このほか各校ともそれぞれ同窓会を維持発展する工夫をしています。

## 白楊魂チャレンジジ



北海道函館中部高等学校長

田尻勝敏

す。年一回の会合ですが、各同窓会の知恵を聞くのが楽しみになっています。

白楊ヶ丘同窓会においても、札幌支部をはじめ各支部に相互に出席することを通じて、良い点を参考にして共に発展していくことを期待しております。今後ともよろしくお願い申し上げます。

白楊ヶ丘同窓会札幌支部の皆様には、日頃より本校への温かいご支援とご協力を賜り、厚くお礼を申し上げます。また、この度の総会・懇親会のご盛会を心からお慶び申し上げます。五月に新天皇が即位され、元号が「平成」から「令

和」へ変わりました。「令和」には、「人々が美しく心を寄せ合う中で文化が生まれ育つ」という意味が込められているそうです。また、出典が梅にまつわる和歌であることについて、「厳しい寒さの後に春の訪れを告げ見事に咲き誇る梅の花

のように、一人ひとりの日本人が、明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる日本でありたい」との願いが込められているそうです。令和においても、道南の中心校として社会に有為な人材を送り出していきたいと思います。

### 一 進路状況

平成三十九年度卒業生の進路状況については、国立大学に九十四名（昨年度百十名）、防衛大学校に一名、私立大学・短大に延べ百八十九名（昨年度百五十一名）、高等看護に延べ十一名、専修学校に延べ六名、就職三名という状況です。過年度生は国立大学に二十四名、国立看護大学校に一名、私立大学・短大に延べ十九名となっています。

国立大学の現役合格者は、昨年より減少しました

が、京都大学一名、東北大学三名、北海道大学九名、筑波大学三名をはじめ難関国立大学に多数合格者を出しています。医学部医学科は、札幌医大現役生一名、旭川医大過年度生二名と健闘しています。また、私立大学においても、慶應、明治、法政など首都圏の大学にも例年同様に合格しています。第百二十一期卒業生の努力と健闘を高く評価したいと思います。現在、今年度の入試結果について分析するとともに、大学入試改革、新学習指導要領に対応した教育課程の見直しを含め、しっかりと検討を重ね、改善を図っていきたいと思います。

また、定時制課程においては、担任をはじめとする先生方のきめ細かな指導の下、私立大学に二名、専修学校に四名が進学し、六名が就職しています。昨年度に比べ就職者の割合が増加

しています。

## 二 部活動

文武両道の伝統を大切に生徒は日々の勉学に励む中、部活動にも全力で頑張る、高いレベルでの両立を目指しています。今年四月の時点で生徒の部活動の加入率は約九十五パーセントと例年同様高い加入率となっています。

五月末に行われました高体連函館支部の大会では、各部とも素晴らしい活躍をみせてくれました。全道大会へ進出する部活動は、テニス部、バドミントン部、バスケットボール部、バレーボール部、卓球部、弓道部、柔道部、陸上部、剣道部、水泳部、囲碁将棋部、LMC、ESS、放送局などです。中でもテニス部、卓球部、バドミントン部、弓道部がそれぞれ男子団体優勝に輝き、中でもテニス部とバドミントン部は、男

子団体・男子シングルス・男子ダブルス全てを優勝という輝かしい成績を残しました。各部の全道大会での上位進出を願うと共に、これから大会を控えている野球部、そして吹奏楽局や音楽部など文化系の部活動の活躍を期待しています。定時制課程においては、六月一日に支部大会が行われ、女子バドミントンと卓球が全道定体連へ駒を進めました。

## 三 新たな時代へ向かっての学校の動き

来たるべき新時代を表す「Society5.0」という言葉が、よく聞かれるようになりました。Society5.0とは、狩猟・農耕・工業・情報社会に続くサイバー空間とフィジカル空間を高度に融合させることにより、地域、年齢、性別、言語等による格差なく、多様なニーズ、潜在的

なニーズにきめ細かに対応したモノやサービスを提供することで経済的發展と社会的課題の解決を両立し、人々が快適で活力に満ちた質の高い生活を送ることのできる、人間中心の社会とされています。その社会では、「共通して求められる力の育成」新たな社会を牽引する人材の育成」が求められ、そのために取り組むべき政策の方向性として、

I 「公正に個別最適化された学び」を実現する多様な学習の機会と場の提供  
II 基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力をすべての生徒が習得  
III 文理分断からの脱却があげられています。グローバル化の進展やAIの飛躍的発達により社会が大きく変化しており、それに対応し高校をはじめとする教育機関も改革を押し進めています。

業実践など特色ある取り組みや講習・模試の指導・面談・出前授業や大学別進路相談会・医進類型などきめ細かな指導に裏付けられた進学実績。そして、文武両道・生徒の自主性を重んじ、効率的な練習で輝かしい結果を残している部活動など、これらの函中ならではのものを積極的に発信していきます。

定時制課程においては、多様な個性・進路希望をもった生徒が入学してきており、ひとりひとりを大切にすきめ細かな指導を継続していきます。

#### 四 結び

日本手話研究所は、「令和」の表現を、「指先を上に向けて五本の指をすぼめた片手を胸の脇に出し、前に動かしながら指先を緩やかに開く」としました。これは、「花のつぼみがゆるやかに開き、やがて花びら

が環となった指先からふくよかな香りを放ち、和みゆくさま」を表しています。

手話では、耳より前空間が「未来」を意味しています。これから新しい時代を生きる函中生が未来に向けて花を咲かせ、「令和」の時代も活躍できるように、前述した資質・能力の育成を目指し、生徒・保護者・学

校・地域が一体となって取り組んで参ります。

終わりに、同窓生の皆様にはこれからも本校へのご支援を賜りますようお願い申し上げますとともに、白楊ヶ丘同窓会札幌支部の益々のご発展と皆様のご健勝を祈念申し上げます、ご挨拶といたします。

## 回想

### 厳しくも楽しかった バレー部

片野 則 夫

(第七六期・昭和四十九年卒)

知識、技術を生かし元気に働いています。

#### 一 バレーボールに 捧げた高校生活

高校時代の一番の思い出は、バレーボール部での部活動です。当時ミュンヘンオリンピックで金メダルを目指していた、松平監督率いるバレーボール日本男子への期待や、人気TV番組「アタックナンバーワン」、「サインはV」に刺激され、中学からバレーを始めました。単なるミーハーだったこともあって、高校で続けるつもりはありませんでした。

当時の中部高校男子バレー部は、後に登別大谷高校女子バレー部を全国大会に導いた二年生の川村キャプテン一人しかおらず、崩壊寸前の危機。私は誰から連絡をもらったか忘れてしまいました。練習参加の誘いを受けて、軽い気持ちで参加することにしました。

練習は入学前から始まり

ました。集まった新入生は六人。OBで大学生の佐々木先輩が好意で練習を見て下さりました。男子バレーの一時代を築いた方の指導は、まさに「スポ根」番組のような厳しさ。「覇気がない」「怠慢プレーだ」と声を張り上げて怒られたことは何度もありました。

函館中部高校を卒業して、もう四十五年になりました。すでに廃校となった船見中学校の時、担任の先生からの勧めもあって受験し、町の端にある弁天から三年間、電車通学しました。卒業後は道内の大学へ進学、社会へ出てからは転

職も経験した後、札幌の通信機器メーカーに落ち着きました。十年間の横浜での単身赴任を経て、六十歳で定年退職して、自宅を構える北広島に戻りました。「元気なうちは働き続けたい」と、現在は恵庭の電子機器製造会社で、前職で培った

厳しい高校生活になるとは思ってもおらず「辛い三年

土曜、日曜日もない練習漬けの毎日でしたが、定期試験の一週間前からはきちんと休みになりました。その間は練習から解放されるのですが、授業に追いついていない分、今度は集中して勉強の挽回をしなくてはなりません。中部高校の教育レベルは高く、地理の地名や英語の単語、イデオムの量は膨大で、入学時は面食らいました。時間がもつと欲しいと思いましたが、さしたる情熱もなく入部した私は、文武両道の厳しい高校生活になるとは

間になりそうだ」と肩を落としたものです。

## 二 仲間と全国大会を目指して

部活と勉強に追われ、心が折れそうになっていた私でしたが、いつしか仲間と一緒にかつての黄金期の栄光と勢いを取り戻し、全国大会へ行こうとチーム一丸となって練習に励みました。熱血指導は実を結び、一学年が終わる頃には市内のベスト三を狙えるレベルに。二学年以降は全道大会出場の常連校となりました。しかし、最後まで全国大会常連校の東海大四高校を打ち破ることで、夢は叶いませんでした。

の青函大会では、青森へ青函連絡船で移動したことを思い出します。練習や試合での掛け声「函中ファイター」が懐かしいです。また、ミュンヘンオリンピックで初優勝を成し遂げたバレーボール日本男子が、本校で練習を行い、その先進的な練習を間近で見学できる機会もありました。監督や関係者のご尽力があったからこそ実現できたことなのでしょう。

私が厳しい部活を続けてこられたのは、仲間がいたから頑張れました。みんな不平は言うもののバレーが好きで頑張りました。仲間と一緒に全道大会で道内各地を回り、時には夜行列車で移動したこと。年に一度

の生活に追われ、たまにしか行けなくなってしまいました。残念ながらOB会は十年ほど前に消滅しました。部活動の近況を聞きながらOB、OGと和気あいあいと親睦を深める、心温まる会は大好きでした。長年運営に携わって頂いた先輩方に改めて感謝致します。

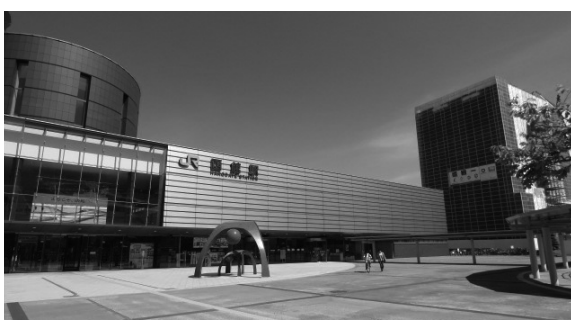
## 三 卒業以来の旧友との再会

長い間、高校と関わる機会がなかったのですが、五年ほど前、横浜に単身赴任していた時にバレー部の同期から「白楊ヶ丘同窓会の幹事年度が近づいているので、みんなで集まろうとしている」と連絡があり、東京の同期会に初めて参加しました。卒業以来となる同期がほとんどで、顔は覚えていたが名前が出てこない。近況や当時のことを話しながら、だんだんと思い出し、会話が弾みました。

そんな折、女子バレー部の同期・加茂さんがニューヨークでジャズプレイヤーとして活動していることをふと思い出しました。ちょうど妻とニューヨーク旅行を考えている時だったので、頑張っている彼女に会いたくなり、同期会で知ったメールアドレスへ連絡すると返事がありました。初めて行ったジャズクラブがニューヨークにある昔の趣味をしたコットンクラブで、そこでのプレーヤが同期の加茂さんとなりました。素敵なピアノと歌声をプレゼントしてもらい、再会もできました。

より規模は小さく、みんな東京へ行くのだと改めて実感し、少し寂しかったです。最近では年齢が、時代の流れか、終活年賀状を受け取ることがあります。ネット社会が加速し、人と人との関係が希薄になっていくことに寂しさを感じます。人は一人では生きていけません。同窓会は人をつなぐ機会を作ってくれます。高校時代を思い出させてくれる場だけではなく、未来に向かって人をつなげる場でもあるのだと思います。

その後、同窓会の幹事年度には東京支部の総会・懇親会に参加。校長先生や、大勢の先輩、後輩が集まり会は盛況でした。バレー部の後輩とも再会でき、楽しい時間を過ごしました。昨年は札幌支部の同窓会に初参加しました。思っていた



ホテル建設中の函館駅前

# 回想

## 高校時代を振り返りながら

小松 宏行

(第八〇期・昭和五十三年卒)

### 一 はじめに

「令和」最初の寄稿が私  
で良いのか、卒業以来書いたことのない文章に戸惑いながら、四十年以上前の記憶を何とか絞り出し振り返ってみたいと思います。

### 二 函館のこと

新天皇が誕生した昭和  
三十五年、大門近くの新川町に生まれ育ちました。当時、大門はそれこそ夜遅くまで多くの人出で賑わっており、また七〜八か所はあったでしょうか映画館があり、まさに東京以北最大の文化の中心地といっても過言ではなかったと思いま

す。また、家の前にはステージを備えたロータリーがあり、「港まつり」では二重三重の踊りの輪がいつまでも途切れることなく続いていました。金魚すくい、植木屋など夜店もそのロータリーを起点として今のグリーンプラザのさいかデパートまで。左右に折れ、駅方面は和光、大森浜方面は森文化堂あたりまでの範囲で隙間のないくらい並んでいて、それに負けないくらい人が溢れていたことを覚えていています。

最近、函館に帰る機会がありました。前述の遊び場はなくなり、空き地ばかりが目立ち、以前は見えない

かった遠くの景色が見えるようになりました。そして、函館の夜空を誇らしげに照らしていた棒二森屋のサーチライトも消えていて寂しくもあり、今は昔と感慨深いものがあります。

東京勤務の時、出身を尋ねられると自信をもって函館と答えてきましたし、大変羨ましがられたものです。函館には観光資源があり、農水産物に恵まれた魅力がたくさんあるはずです。いつの日か再び昔の元気が戻ってくることを期待します。

### 三 高校時代のこと

昭和五十年に函館中部高校に入学しました。自由な校風でまた自主性を重んじてくれていたように思います。当時でも珍しく制服が無いため、服に困った時は中学の学生服を着ていました。また、中部では非常に聡明で個性的な友人たちに

出会いました。見た目は悪ガキ風なのに先生が困るような質問や意見を言ったかと思えば、授業を抜け出した際に二階から飛び降り骨折してしまうなど、愉快な出会いでした。

修学旅行はまだ連絡船と列車での移動でした。正直、旅行での出来事についてそんなに覚えていないのですが、初めての寝台車と関西旅行に興奮したことだけは覚えています。それと旅先で聞いたソ連の戦闘機ミグ二五の函館空港への強行着陸のニュースが印象的でした。

高校時代は帰宅部でした。同級生の中に汽車通の友人たちも多く、家も駅から近いこともあり、連日のように誰かが来ており、一番多い時には八畳程度の部屋に十人以上がコーラとポテトチップスを持ち寄っては、兎に角、長い時間を一緒に過ごしていたように思います。そのような家でし

### 四 最後に

たので、文化祭が終わり夜の函館山登山で余韻を楽しんだ後、帰宅すると先に部屋で寝ている友達がいたこともありました。当時、両親は友人が集まってくれることを歓迎してくれていました。その時があったからこそ、今でも会えば高校時代に戻って話ができる関係が出来たことに改めて両親に感謝しかありません。

私も八〇期は、現在でも年三回程程度、他にも誰かが札幌に来る際にはススキノに集合しています。また四年に一度は函館に大集合して旧知を温めており、それが今年十月に催された頃す。特に五十歳を過ぎた頃



金森倉庫から函館山を眺め



からは皆が元気で会えることがだんだんと嬉しい年齢になってきました。

先日、地下歩道で反対から歩いてきた男性と人混みにもかかわらず不思議な感じで目が合いました。三十年ぶりの同級生でした。お互い時間のない時で、一言二言の立話でしたが瞬間で時間が戻り大変嬉しかったものです。

同窓生の方々、同級生の様々な分野、それぞれのポ

ジションでの活躍を目にする度に嬉しくあり、誇りであり、自分の支えになって

います。新しい「令和」の時代になっても、函館中部高校に学んだこと、人とつながれること、そしてそれが何よりの財産で誇りであることには変わりない真理があるのではないのでしょうか。今後も新しい時代の後輩たちのためにも微力ながらも貢献できればと思います。

# 回想

## 同窓会・同窓生の近況など

綱 森 史 泰

(第〇〇期・平成十年卒)

先日、大通公園で開催されていた「さつぽろライラックまつり」に立ち寄った際、たまたま中学生・高校生の吹奏楽部のステージ演奏を聴いて、吹奏楽部に

所属していた中学・高校時代のことを久しぶりに思い出しました。初めて人前で演奏したのは、五稜中学校（残念ながら、五稜中学校は平成二十八年三月末で

閉校となり、大川中学校、桐花中学校と統合して五稜郭中学校となりました。）

一年時の五稜郭祭のパレードでしたが、当時はまだ入部したばかりで楽器を鳴らすこともままならず、ほとんど楽器を構えて歩くだけだったという記憶があります。それでも、先輩方が楽しそうに演奏しているのを見て、仲間と一緒に演奏することの楽しみを強く体感したことを覚えています。

楽器演奏は今でも続けていますが、中学・高校時の吹奏楽部での「原体験」の影響が大きいのかなと改めて感じました。

仕事の関係で思いがけず中部の先輩・後輩と出会うこともまた嬉しいことです。札幌で弁護士として仕事を始めて以来、中学生・高校生向けの「法教育」の授業や模擬裁判などの活動に関わっています。「法

みがないかと思えますし、「法」の「教育」というと六法全書に書かれた法律の条文を暗記させるような教育かと思われるかもしれませぬ。しかし、そのようなイメージとは異なり、実際の法教育では、法律の知識を覚えることではなく、そ

もそもなぜ法律が必要なのか、なぜこのような法律が作られたのか、法律が実際にどのようなに使われるのかというように使われるのかというように考えることを考えてもらうことに主眼を置いて

います。十五年近くの法教育活動の中で多くの教員の方々と出会うことができ、一緒に法教育の取り組みをしてきましたが、その中でも同窓の教員の方々にはやはり特別な親近感があります。先輩のH先生と後輩のN先生には、通常の業務だけでなく大変お忙しい中、いつも法教育の関係でお世話になっております。

平成三十年度から北海道大学法科大学院（ロースクール）の非常勤講師として、将来の法曹を目指す学生たちに向けて、「公法実務演習」という講義を担当させて

いただいております。この授業では、憲法や行政法などに関わる裁判事件を代理人として実際に担当した弁護士をゲスト講師に招き、その経験等についてお話をいただくことにしているのですが、私を含めて十三

人の講師のうち四名（先輩のF先生、S先生、K先生と私）が中部高校出身という構成になっています。中部高校の先輩方から講義でお話しいただく内容は、学生たちにとって大変勉強なるものですが、私にとっても先輩方が活躍されている話を聞くことができることは大変嬉しいことです。

白楊ヶ丘札幌支部の定期総会・懇親会には、ここ数年欠かさず出席をさせてい



空より函館を眺めて

ただいております。年に一回ですが、同窓の諸先輩・後輩の皆さんと懇親を深め、懐かしい校歌と一緒に歌えることはとても嬉しいことです。最近、同業の後輩たちに声をかけて、三名の後輩（Kさん、Mさん、Mさん）に参加してもらうことができました。懇親会が終了した後に更に二次会に行つて、高校時代の想いでや仕事の近況などの他愛もない話をする事ができるのはとても嬉しいことです。これからも後輩たちが増えていくことを期待しています。

# 回想

## 高校時代を

### 振り返って

#### 三浦航志

(第三期・平成二十二年卒)

#### 一 はじめに

私は、高校卒業後、進学のため上京し、就職を機に北海道に戻つてまいりました。東京には、中部高校の同期はいたものの、中部高校の先輩や後輩の方と交流する機会は全くありませんでした。就職を機に同業の先輩にお声をかけていただき、初めて二〇一八年の白楊ヶ丘同窓会札幌支部に参加し、本稿を寄稿させていただきました。自由な校風について

#### 二 自由な校風について

私は入学して、中部の自由な校風にとっても驚いた記憶があります。私服通学

#### 三 行事について

白楊祭は、中部の行事の

中で一番好きな行事でした。全学年共通で学級旗と衣装を生徒自ら作製し、千代台にて創作ダンスを披露します。高校一年生は合唱、高校二年生は学級展示、高校三年生は創作劇をします。

高校一年生のときに、授業終わりに自転車で七重浜近くまでペンキの買い出しをして、土方啄木浪漫館の近くのびっくりドンキーでご飯を食べた思い出や、準備わりに大川町のタイヤ公園で遊んだ思い出があります。なにが楽しかったかは思い出せませんが、体育館下の駐輪場で毎日笑いながら、作業していたのはいまでも覚えています。

高校二年生の学級展示は、中部のすぐ向かえにあった青山米穀店という駄菓子屋を再現しました。青山は、部活終わりや授業終わりに寄ってカップ麺や駄菓子を食べた思い出を満たしてくる憩いの場所です。

た。青山でお菓子を買ってレジまで持つていくと「はい、五十円。」と店主のおばあちゃんが言ってくれます。店主さんに学級展示で青山を作りたいですと伝えると、快く承諾してくださる。展示に使うダンボールを製作するに決めたから、青山でたくさん駄菓子やカップ麺を食べて、容器や包装を捨てずに綺麗に洗い、陳列して並べました。

展示班だけでは足りませんでした。学祭の準備は、どの班も青山でお菓子を調達して、食べながら準備を進めるので他の班にも協力を仰いで容器や包装（食べ終わりのゴミ）を回収しました。準備中は、忠実に再現できていると思つていたのですが、実際は、ゴミを集めて置いていただけなので、黒板に「青山米穀店」と書いていなければなにも展示しているのかさっぱり

わからないものでした。高校三年生になると、受験を控え勉強を追い込む時期でしたが、放課後の準備期間が待ち遠しく、学祭を楽しみに勉強していました。授業が終わわり、学祭準備をし、その後に勉強という毎日を送っていたと思います。

私は学級旗班だったので、劇の裏方を手伝っていました。「ウミガメのスープ」という劇で、航海中、遭難し、無人島についた遭難者が生き残るために、餓死してしまった仲間の肉をウミガメと偽って仲間に食べさせるというストーリーでした。劇中に幕を持ちたり、小道具の移動等が主な仕事でしたが、一言だけ「おーいー誰かいるのかー?」いま助けに行くぞー!とセリフをいただきました。遭難者を発見し、遠くから呼びかける役で、舞台の裏から大声で迫真のあるセリ

フをなりきって言ったつもりでしたが、後に劇のDVDを見ると、全くの棒読みで恥ずかしくて観れたものではありませんでした。学祭が全て終わった後は、十人ほどで友人宅に泊まりました。今は、お酒が好きでよく飲みに行きますが、学祭の準備が連日続き、本番も全て終わった後でお酒もないのに(当然です。)よく、朝まで遊んでいたなど学生時代のエネルギーには驚かされます。

#### 四 終わりに

本稿を書かせていただくこととなり、当時は思い出すため、三年間同じだったクラスの友人と高校時代の話をしましたが、とても楽しく、ここで語りつくせない思いばかりです。

中部高校にて高校生活を送れたことをとても嬉しく思います。在学中お世話になりました先生方(特に私

## 2018年度 収支計算書

白楊ヶ丘同窓会札幌支部

自 2018年4月 1日  
至 2019年3月31日

収入の部		
科目	金額	摘要
前年度繰越金	1,075,206	
年会費	232,000	@2,000円 116名
終身会費	175,000	@10,000円 3名 @15,000円 7名 @20,000 2名
総会懇親会費	254,000	@5,000円 46名 @3,000円 8名
寄附金収入	344,000	59名
雑収入	30,000	総会祝儀等
預金利息	5	郵便貯金
当期収入合計	1,035,005	
収入合計	2,110,211	

支出の部		
科目	金額	摘要
総会懇親会費	248,200	会場関係費
講演会費		講師航空券代
印刷費	226,839	白楊ヶ丘札幌、総会通知、年会費払込票等印刷費
会員名簿作成費		
通信費	154,320	総会通知、支部報、発送費等
旅費交通費	73,000	本部・他支部総会参加旅費、その他交通費
会議費	44,526	役員・幹事会費
事務費	24,277	文具・消耗品費
振替手数料	20,670	郵便振替手数料
雑費	30,190	本部・他支部祝儀・その他雑支出
当期支出合計	822,022	
次期繰越金	1,288,189	内訳財産目録のとおり
支出合計	2,110,211	

財産目録		
種類	金額	摘要
現金	6,351	
振替口座	44,770	
郵便貯金	1,237,068	
合計	1,288,189	

### ご寄附御礼

今年度は次の方からご寄

の一年生・三年生のときの担任の綾先生とハンドボール部顧問であり二年生のときの担任の北川先生、友人、白楊ヶ丘同窓会の運営に携わる全ての皆様に感謝申し上げます。

附を頂きました。ここにお名前を掲載し、御礼に代えさせて頂きます。(敬称略、卒業期順)なお、このほか氏名不掲載希望の方が十四名おります。(令和元年六月十日現在)

(46) 武田幹夫、(48) 能戸清、(49・50) 杉上忠幸、(52) 稲岡七朗、(53) 地崎夫美、(54) 吉田恭平、(定時2

期) 住吉洋三、(56) 堀槇子、(57) 阿部弘、(59) 小林三樹、(63) 小川毅、(68) 今井浩三、(69) 安藤牧子、(72) 藤田美津夫、吉川正彦、(73) 尾埜善久、黒田信彦、(75) 西出幸夫、(79) 久保明弘、前田香折、(80) 伊藤伸子、(87) 中村伸夫、(104) 中村大輔

# 白楊ヶ丘同窓会札幌支部 第39回定期総会・懇親会

## 講演会

## 「高校時代、及びそれとはあんまり関係ないマンガの話」



講演者 山本 直樹 氏 (第80期)

- (ご略歴) 1978年 北海道函館中部高等学校卒業、(80期)  
1981年 小池一夫が主催する「劇画村塾」に入塾する。  
1983年 早稲田大学教育学部国語国文学科卒業。  
1984年 森山塔名義で「ほら、こんなに赤くなってる」でデビュー。  
1984年 山本直樹名義で「私の青空」でデビュー。  
1991年 『Blue』が初めて東京都条例で有害コミック指定を受ける。  
1992年 「コミック表現の自由を守る会」に参加。  
2008年 『堀田』3巻が東京都条例で有害コミック指定を受ける。  
2010年 『レッド』で第14回文化庁メディア芸術祭マンガ部門優秀賞を受賞。

### 函館中部高等学校校歌

作詞 函館中部高等学校教諭

藤原直樹

作曲 函館中部高等学校教諭

酒井武雄

一、火柱のはためく峰も

年古りて緑の臥牛

宇賀の浦風の砂山

波よせてくずれ流るる

見よや物なべてうつろふ

窮みなし流転の相

二、北の国雪深けれど

その底には草は芽ぐめり

野山荒れ鳥潜めども

やがて来ん春の光に

万象の蘇る見よ

ここにあり不滅の生命

三、白楊のさやめく丘辺

秋深き梢揚げば

牙え渡る銀河の彼方

幽けくぞ星雲燃ゆる

胸に満つ久遠の思ひ

遙かなり真理の彼岸

四、限りなき流転の中に

生命あり不壊の学び舎

聞けや今窓の外遠く

新潮の入りくるひびき

よしさらば若人われら

踏まんかな希望の門途

### 函館中学校校歌

作詞 第一高等学校教授

土井晩翠

作曲 東京音楽学校教授

岡野貞一

一、玄冥の北の一道

関門の岸に臨みて

青春の薫にしろく

基おく育英の場

二、集い寄る千余の子弟

人生の花の綻び

身を鍛へ心を練りて

向上の一路を辿る

三、宇賀の浦万頃の水

駒が岳千仞の山

微を積みて高きに至り

滴より空をもひたす

四、形ある無言の教

仰げ我が紅顔の子等

業成らば双の方の上

興国の運も負へかし

五、母校の名子弟の誉

花と香と常に伴ふ

任重く道の遠きを

嗚呼健児勉めざらめや

## 編集後記

この支部報を編集している最中の六月十四日に、函館を日帰りです訪れてみました。函館アリーナでは、函館中部高校が当番校でバドミントンのインターハイ北海道予選が行われていました。函館には年に一度帰る程度ですが、ラッキープイロとハセガワストアには訪れてみたくなるものです。さて、今回の函館滞在中で最も気になったことは建築中の「ホテル」がたくさんあったことです。一部は支部報の写真でも紹介しましたが、駅前含めてあちらこちらにホテルが建築されようとしています。全国各地で同様の現象は起きていますが函館にもその波が訪れていようとは驚きました。確かに観光資源にあふれた街です。食べ物も美味しいものばかりです。あとは、街の人たちの活気でしょうか。誰かに住む街聞かれたら、「はい、函館」と答えてほしいですね。私たち、函館を離れて良さを知った者が函館の良さを発信していくタイミングなのかもしれません。

(一〇四期中村大輔)